

# 教室研究は教師に何が提供できるか

お茶の水女子大学助教授 岡崎 眸

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマは教室研究は教師に何が提供できるかです。

日本語教育の現場は多様で複雑です。どの現場にも直接応用できたり、どの現場の問題にも明快な説明を与えたりできる理論や原理はなかなか見つかりません。そうした中で、教師は教育経験を一つまた一つと積み重ね、自分の授業やクラスの学習者について自分なりの見方や評価を形作っていきます。こうした見方や評価を、データをもって客観的に見直してみるとどうなるでしょうか。教室研究は、教室で起きる諸現象について、教師の個人的な経験とは異なる枠組みで、教師が教える経験を通して得た知識を検証する手がかりを提供することを目指すものです。

ここでは、これまで第二言語（外国語）教育の教室研究としてなされてきたテーマを幾つか紹介し、それらの研究から得られた、個々の教師が自分の授業を見直すときの手がかりについて述べます。

## (1) 授業分析

私たち教師は、自分自身の主観的な感じ方や評価を超えて客観的に自分の授業を捉えたいと思うものです。そこで、様々な授業分析の枠組みが提起されてきました（FLint<sup>注1</sup>、COLTなど）。例えば、コミュニケーション能力を養うことを目的とした活動を授業に取り入れているつもりだが、客観的に見てもそう言えるのかを知りたい場合には、COLTによる検証ができます。COLTは授業がどれくらいコミュニカティブであるか、その程度を測ることを目的とした分析方法だからです。COLTによる分析では、まず自分の授業を録画します。それを見ながら、何分かおきに授業場面を取り上げ、そこでの教師及び学習者の発話を、下に記した特徴毎に分析します。

目標言語の形に注目させること、インフォメーションギャップの有無とその程度、発話の長さ、発話の目的は言語の形式かそれとも言語の意味か、他者の発話を考慮に入れた発話か、誰が談話を開始しているか、言

語形式はどの程度制限されているか

このようにして得られた情報に照らして、自分の授業が自分の意図通りコミュニケーション能力を養うものになっているか、いないとすればどこを改善すればよいか、について考える手がかりを得ることができます。

## (2) ティーチーターク (teacher-talk)

授業中の教師の発話を観察すると、教師は、学習者の言語のレベルに合わせるように、話し方を操作していることが分かります。学習者の言語の熟達度（language proficiency）に合わせて修正された教師の話し方をティーチーターク（以下TT）と呼び、その特徴や学習者の理解に及ぼす影響を探る研究が行われてきました（Chaudron1988）。その結果、TTの特徴として次のようなことが指摘されています。(1)基本的な語彙や短い単純な文型、平叙文より疑問文を多く使う（統語上の修正）、(2)ゆっくり、はっきりと、ポーズも十分にとる（音韻上の修正）、(3)学習者が自分の話を理解しているか頻繁に確認したり、学習者の発話の中で明確でないところは聞き直したり、また自分の言いたいところを際だたせるために繰り返したりする（談話上の修正）。

TTは、発話内容を学習者が理解しやすいようにという観点から修正がなされています。この結果、学習者にとってはインプットが理解しやすくなり、言語習得が促進されると考えられます。自分のTTはどのような特徴を持っているか。それは個々の学習者にとって理解しやすいものであるか。これら进行分析することで、言語習得につながるTTができていくかについて、手がかりを得ることができます。

## (3) 教師による質問

授業中の談話は一般的にI（initiation）R（response）E（Evaluation）（切り出し - 反応 - 評価）連鎖として特

徴づけられます。教師の質問によって談話が開始され(I)、それに学習者が反応し(R)、その反応を教師が評価する(E)ことによって一つの談話が収束するというものです。こうしたIRE連鎖との関係で、教室談話の特徴を理解するのに、教師の質問は重要です。

教師の質問は、教師が答えを知っていて学習者の理解を試す目的で行う提示質問(display questions)と、教師も答えを知らず答えを探す目的で行われる指示質問(referential questions)に分けられます。教室では、提示質問が多く使われることが指摘されています。例えば、教室内と教室外の自然談話を比べた研究によると、教室内では提示質問が圧倒的に多く逆に、教室外ではほとんどが指示質問であったと報告されています。また、この二つの型の質問が学習者の反応に及ぼす影響を調べた研究によると、提示質問より指示質問の方が長い文による答えを学習者から引き出すことができたとされています。さらに、質問をしてから学習者からの反応を得るまでの待ち時間については、教師は一般的に即座の反応を好むこと、ところが待ち時間が短ければ短いほど学習者の反応は短いものとなるという報告があります。

教師による質問の研究を通し自分の質問はどのような特徴を持っているか、例えば、学習者が自分から談話を切り出したり、自分で話題を持ち出したりすることが十分できるような教室談話を作り出しているかについて、手がかりを得ることができます。

## (4) 学習ストラテジー

学習者は学習をより効果的にするための様々のストラテジーを使っていることが指摘されています(Oxford 1990)。例えば、「学習の計画を立てる」、「分からないときは聞き返す」、「記憶の仕方を工夫する」、「自分が学んでいる言葉を話す人と友達になる」などは、すべて学習ストラテジーと言われるものです。こうした学習ストラテジーを効果的に使えるか否かで学習成果は左右されず。学習ストラテジーにはどのようなものがあるか、包括的なチェックリストが提起されています(OxfordによるSILL<sup>注2</sup>など)。そうしたリストを使って、学習者はどのようなストラテジーを使っているか、そして、それは学習成果や学習者の属性(言語能力レベル、技能、出身国、男女、年齢など)とどのように関連しているか、を調べる研究がなされています。また、特定の学習ストラテジーを教師が意識的にトレーニングした場合の効果も測る研究も行われています。

自分の教えている学習者はどのような学習ストラテ

ジーを使っているかをSILLを使って調べたり、その結果を学習者にフィードバックすることによって、学習への意識化をはかることができます。

## (5) タスク

学習者はインプットを得るだけでなく、自分でアウトプット(話したり書いたり)することで、仮説検証の機会を得ることができ、意味的処理から統語的処理へ移行し、文法能力の伸張が可能となると言われています。こうしたアウトプットの機会が与えられるという点から、タスクが注目され、どのようなタスクがアウトプットをより豊富に提供できるかを明らかにする研究が行われてきました。その結果、「意見交換タスク」(opinion exchange)、「意志決定タスク」(decision making)、「問題解決タスク」(problem solving)に比べて、(1)参加者が少しずつ異なった情報を持つこと、(2)その情報を全部合わせなければ答えが得られないこと、(3)正しい答えが一つだけあること、の三つの条件を満たすジグソータスクが最も学習者間の相互交渉を引き起こす、つまりアウトプットが多くなることが指摘されています。

ただし、学習者の属性や学習者の組み合わせによっては違う結論がでてくることも十分考えられます。そこで、自分の教室で、例えばジグソータスクと意志決定タスクを行い、その談話を録音し文字起こしをして、学習者間の相互交渉を詳細に観察することで、自分のクラスの学習者はタスクによってどのように異なったアウトプットを産出する傾向を持つかについて手がかりを得ることができます。

注1. FLint: Moskowitz, G. による相互作用分析の枠組みで授業を観察しながら3秒毎に教師発話と学習者発話を与えられた項目に沿ってチェックしていく。

注2. SILL: Strategy Inventory for Language Learningという言語学習ストラテジー調査法で62項目のストラテジーからなる。

## 基本的な参考文献

- Chaudron, C. 1988. Second language classrooms. Cambridge University Press.
- Ellis, R. 1994. The study of second language acquisition. Oxford University Press.
- Johanson, K.E. 1994. Understanding communication in second language classrooms. Cambridge University Press.
- Oxford, R. 1990. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know. Heinle and Heinle Publishers.
- Seliger, H.W. and Long, M.H. (eds.) 1983. Classroom oriented research in second language acquisition. Newbury House.
- 小池生夫監修 SLA研究会編 1994. 第二言語習得研究に基づく最新の英語教育. 大修館書店
- 宮崎里司・J.V. ネウストップニー共編 1999. 日本語教育と日本語学習. くろしお出版